

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、句読点・記号は字数に数えます。

言葉は生き物です。常に変化しています。この変化を「ゆれ」と考えるのか、「乱れ」ととらえるのか。人によって立場は異なるでしょう。

一九九五年（平成七年）に答申を出した国語審議会によると、言葉の「ゆれ」とは客観的な認識のことであり、「乱れ」はカチ判断を伴った認識だということです。

たとえば「ら抜き言葉」を使う人が増えてくると、これを言葉の「1」と考えます。このとき、「ら抜き言葉」は正しくないと考えている人からすれば、こういう状態は、言葉の「2」だというわけなのです。

言葉は変化する。変化の途中で、本来のものとは異なる用法が定着し始める。最初は「誤用だ」で終わるが、次第にその用法を使う人が増えてくると、「3」として扱われる。その用法が気になる人からみれば、「4」である、という構図が浮かび上がってきます。

年輩の人が嘆く言葉の乱れ。でも、言葉の変化には、それなりの合理性があるのです。この点について井上史雄教授は、言語、空間、時間、社会の四つの次元から説明しています。（井上史雄『日本語ウォッチング』）

まず「言語の次元」です。言葉の変化には、言語学的な理由があるということです。変化した後で振り返ってみると、合理的な方向へ変わっているというのです。基本的に、言葉は単純化・明晰化・労力節約の方向へ進

んでいきます。「ことばは経済的な方向に進化する」のです。

次に「空間の次元」です。東京の言葉が地方に広まったり、地方の方言がいつしか東京に入り込み、そこから全国に流れていくという動きもあります。

続いて「時間の次元」です。歴史的变化のことです。言葉の変化は、まず若い人たちの間で広がります。これが世代間の差として受け取られます。社会の世代交代とともに、社会に広く通用する言語も変化するので

「今の老人のことはと若者のことばの違いの一部分は、じつは長い歴史的言語変化のひとつまなのだ」（同書）

そして最後に「社会の次元」です。言葉の使われ方は、性別により、社会階層により、さまざまな違いが見られます。それがいつしか、たとえば若い女性が先導する形で変化します。上からの押しつけで共通語を広めることもあれば、民衆レベルでの言葉づかいが、いつしか全国に広がることもあるのです。

省略された言葉、方言、若者の流行語、若い女性の言葉。バラエティ番組やタレントインタビューなどはもちろんですが、若者向けの雑誌の表現などでも大きな影響力を持っています。

NHKの場合、新しい用語や、ジュウライなかつた使用法、読み方について、定期的に「放送用語委員会」を開いてセントウしています。専門家の国語学者を招き、放送現場の人間も交えて議論をします。基本的な考え方は、世の中の動きに一步遅れていくということ

「早急」という漢字を「そうきゅう」と読んだり、「重複」を「じゅうふく」

と読んだり、「荒らげる」を「あらげる」(元来は「あらげる」と読んだりする風潮が広がっても、NHKの放送用語は、直ちにその後を追うことはしません。しかし、あまりに広がって、「そうきゅう」と読むことも違和感を感じる人が少なくなると判断すれば、「そうきゅう」と読むことも認めることにします。その場合、本来の読み方は(1)として、キョウウする読み方を(2)の項目に入れるのです。

広く社会での言葉の使用法が変化すれば、放送用語もやがて追認するです。

「言葉の乱れ」を嘆く人はいつの時代にもいるのですが、言葉は、からこそ、「乱れ」たり変化したりするのです。

ヨーロッパのさまざまな言葉のもとになったラテン語は、乱れることがありません。「死んだ言葉」だからです。誰も日常生活で使っていないので、乱れることもなければ、変化することもあります。ヨーロッパの人のキョウウヨウとして学ばれるだけなのです。

(中略)

人間には誤ちがつきものです。私たちは、日常会話で、葉づかいを間違えます。それが自然なことでしょう。その間違いが、その場かぎりで姿を消すこともあれば、広く社会に通用することもあります。やがて、それが新しい言葉づかいになります。それが、生きている、ということなのでしょう。言葉は、誰もが使うことのできる道具です。誰もが使えば、次第に、みんなが使いやすいもの変わっていくでしょう。急激

問3 1 4 には「ゆれ」か「乱れ」が入ります。

1 4 にはそれぞれ「ゆれ」と「乱れ」のどちらが入るか答えなさい。

問4 5 に入る五字の言葉を文中からぬき出しなさい。

問5 6 に入る最も適当な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア あえて イ ぐうぜん ウ 必ず エ しばしば

問6 線A「いつしか」・B「広く」はどこにかかりますか。最も適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

B 社会での言葉の使用法が変化すれば、放送用語もやがて追認するのです。

問7 線①「次第に」と同じ意味になるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 事と次第によつては許可できない。  
イ 式次第ののつとつて進めていく。  
ウ 次第に空が明るくなってきた。  
エ 手当たり次第に物を投げつけてきた。

問8 線②「それなりの合理性」とありますが、これは言葉が持つどのような性質のことですか。「性質」に続く形で、文中から十五字でぬき出しなさい。

な変化は、古くからの道具に慣れ親しんだ人にとっては戸惑うことかもしれませんが、言葉という道具は、自らを変化させることで、新しい時代にも生き続けることができるのではないのでしょうか。

(池上彰『その日本語、伝わっていますか?』より)

\*ら抜き言葉……「食べられる」や「こられる」を、「食べれる」「これる」と言う言い方。

\*次元……見たり考えたりするときの立場。

\*明晰化……はっきりさせること。

\*追認……過去にさかのぼってその事実を認めること。

問1 線a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 文中には次の一文がぬけています。どの文の後ろに入れるのが適当ですか。その文の最後の六字をぬき出しなさい。

こうした言葉は、口伝えに広がりますが、その途中でマスコミに乗ると、一気に全国レベルに拡大します。

問9 線③「言葉は単純化・明晰化・労力節約の方向へ進んでいきます」とありますが、この方向に進んだ言葉はどのような言葉だと筆者は言っていますか。文中から七字でぬき出しなさい。

問10 線④「死んだ言葉」とありますが、「死んだ」状態と同じ内容を表す部分を文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問11 線⑤「人間には誤ちがつきものです」とありますが、どういう意味ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 誤ちは人間と無関係なものではない。  
イ 誤ちは人間に幸運をもたらすものだ。  
ウ 誤ちは人間にいつもついてまわるものだ。  
エ 誤ちは人間に無くてはならないものだ。

問12 線⑥「古くからの道具」と同じ意味の言葉を文中から十二字でぬき出しなさい。

問13 本文の内容に合うものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉がもつ本来の用法と異なる用法が多く使われるようになる  
と、誰もが言葉の「乱れ」だと考えるようになる。  
イ 若者の言葉と老人の言葉とを比べてわかることは、例えば、言葉が長い時間をかけて変化してきているということだ。  
ウ 「放送用語委員会」で、言葉について定期的に議論されているのは、世間の言葉の変化にすぐに応じようとする考えがあるからだ。  
エ 日常生活の中で言葉づかいの間違いが広く社会に通用することはないので、言葉は乱れも変化もしない。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、句読点・記号は字数に数えます。

\* オール木成に入ったということで、私はピアノをやめることにした。毎週火曜日の四時からレッスンだったが、オール木成の練習は毎日六時ごろまであるから行けなくなったのだ。

でもそれは、ただお母さんを納得させるための言い訳だ。オール木成の中でも習い事をしている子は何人もいる。やさおに言っ<sup>\*</sup>て、決まった時間に帰る子もいるし、休日に曜日変更した子もいる。

だからオール木成に入ったことと、習い事をやめるということは、イコールではない。でも、初めのミーティングのときに、やさおはこう言った。

「練習は必ず出ること。病気、けが以外での欠席はゲンソク的に認めない」  
実際このひとことで何人かは習い事をやめた。お母さんたちも、学校の行事という<sup>\*</sup>ことで、案外簡単に習い事をやめさせてくれたみたいだった。そう、大人なんて結局なんだっていいのだ。学校から帰ってきて、すぐにテレビを観たりゲームをしたりしないで、ためになる「何か」をしていれば満足なのだ。

私はこれが絶好のチャンスとばかりにオール木成の<sup>②</sup>ことを持ち出して、ピアノをやめることを堂々と<sup>\*</sup>言った。するとお母さんは、拍子抜けするくらいあっけなく了承してくれた。こんなだったらもつと早く言えばよかった、と後悔したくらいだ。

私はピアノが大きらいだった。ピアノというより、ピアノの練習がいや  
補習レッスンだ<sup>\*</sup>と思えなかった。

私は **4** レッスンに行き、うんざりしながらみどりちゃんに、そのことを告げた。みどりちゃんは、同情とも哀れみともつかない変な表情をして、

「大変だね」

とひとことだけ言った。

けれど、それからしばらくたったある日、みどりちゃんは私に、

「うらやましいよ」

とポツリと言ったのだ。

「えっ、何が」

「ピアノ。レッスン日以外にも、先生から教えてもらえるなんていいなあ  
……」

私は自分の耳を疑った。

「なんで？ なんでなんで。だって無理やりやらされてるんだよ。あまりにも下手だから、しょうがないからやってるんだよ。先生だって本当はイヤヤなんだよ」

「ううん、ちがうよ。さえちゃんには上手になってもいいんだよ。期待してるの、先生は。発表会でうまく弾けるようになって」

「ちがう。絶対にちがうよ。ねえ、みどりちゃん、ほんとにそんなんじゃないんだよ」

「ううん、お母さんも言った。あんたも頼んで教えてもらいなさいって  
……」

でいやでしかたなかった。月曜の夜のあのあせり。あの感じ。でもどうしても練習をする気になれない **1**。

私はみどりちゃんのことを考える。みどりちゃんと私は、同じピアノ教室に通っていて、その教室で春に発表会があった。市内の同じ系列のピアノ教室の生徒が集まって、地元の文化会館で行われた小さなものだったけど、私は案の定「練習をする」というセンスがまったくなく、いつまでたっても上達しなかった。私の強く曲は、十分実力の範囲内の曲だったし、時間は十分すぎるほどあった。

にもかかわらず、いつまでたってもちつとも上達しない私に、先生はあきれかえりながら、最終手段として「補習」という、思いもかけなかったとんでもない隠し技をティジしてきた。

火曜日のレッスン日以外に、なんと日曜日まで特別にレッスンするとい  
うのだ。もちろん、発表会までの期間限定だし、これは先生の好意であつて無理に行かなくてもいいのだけれど、**2** 先生が自分の時間を割いてまで教えてくれるというのに、行かないわけにはいかなかった。お母さんは先生に、申し訳ない、はずかしい、カンシヤします、と深々と頭を下げた。

でも、私は腹立たしかった。せつかくの休みにレッスンに行くなんて、まったくばか<sup>\*</sup>げている。本番になればどうにかなるし、今までの経験からすると、**3** 私は三日くらい前から猛練習をして、なんとか弾けるようになるはずなのだ。

それにこの補習は私のためじゃない。本番で先生が恥をかかないための  
衝撃を受けた。<sup>⑦</sup> 私はこのとき本当に、すごい  
そんなんじゃないのに……どうして……

みどりちゃんは、みどりちゃんの実力より少し上のランクの曲を発表会で弾く。それは、みどりちゃんならできると先生がカクシンしたからで、補習をしないのは、そんな余計なことをしなくても、みどりちゃんはきちんと家で練習してきて、完璧に弾けるのがわかっているから。

それなのに、なんでなんだろう。うらやましいなんて。人によってこんなに受けとめ方がちがうなんて。それはとても怖いことで、私はその日みどりちゃんに言われたことが、頭から離れなかった。自分がこうだと思っていたことが、ほかの人にとってはまったく別の意味を持つ。怖いと思っ  
た。ものすごい恐怖だった。

みどりちゃんも、今月でレッスンをやめる。私は火曜日のレッスンがなくなり、カダイを与えられなくなったことで、これからはもうピアノを弾かなくなるだろう。でも、みどりちゃんはレッスンをやめたあとも、ずっとピアノを弾き続けることだろう。自分ですすんで譜面を買ってきて、<sup>⑧</sup>それができるようになるまで何度も練習をするだろう。

発表会当日、私は自信のなさのために、少しばかりテンポを速く弾きすぎてしまったけれど、それ以外はけっこううまくできた。先生もほっとした様子で、笑顔を見せてくれた。

でも、練習では完璧だったみどりちゃんが、本番で二回もミスってしまったのだ。みどりちゃんはそれでも **5** していたけど、心の中  
ではきつと残念に思っていたと思う。

それとも、私に対して「ほらね、さえちゃんは補習をしたから上手に弾けたでしょ。私は教えてもらえなかったからまちがえて当然なの」と思っていたのかもしれない。そう考えると悲しかったけど、終わってから「ほっとしたねー」となんのふくみもない晴れ晴れした笑顔で言われて、私はそんなふう<sup>⑩</sup>に意地悪く思ってしまった自分を呪った。

先生は、\* おおとりのみどりちゃんのまさかのミスに顔をしかめていて、私は「本当に大人は余計なことをする」と補習のことを思い、「だからこんなことになる」と少し残酷な気持ちで先生のゆがんだ顔を遠くから眺めていたのだった。

ピアノを最初に習いたいと言い出したのは自分だった。先にお姉ちゃんが習っていて、それはとてもたのしそうで気持ちよさそうで、私はお母さんをお願いして、一年生のときからピアノを習いはじめた。

「さえは、本当に飽きっぽいわね……」

台所でお姉ちゃんの結婚進行曲を遠くにききながら、お母さんが言った。「……別にいいじゃん」

何も言いかえせない自分を、私がいちばんよく知っていた。私は本当に飽きっぽいのだ。なんでもすぐに手を出すくせに、あつというまにやめてしまう。そろばんもスイミングも。

ある程度できるまでは一生懸命やるけれど、なんとなくできるようなになると、もうなんだかどうでもよくなってしまふのだ。

(椰月美智子『十二歳』より)

\* オール木成……木成小学校の選抜ポトボールチーム。この代表チー

ムが市の小学校ポトボール大会に出場する。

\* やさお……オール木成の顧問の遠藤先生のあだ名。背が高くひょろりとしていることから「やさおとこ」↓「やさお」となる。

\* おおとり……演芸会などで最後に出演する人のこと。

問1 線a-eのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 1 に入る最も適当な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

い。

ア だらしなさ イ 強情さ ウ 身勝手さ エ もどかしさ

問3 2 5 に入る適当な言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 堂々と イ がっかりと ウ わざわざ エ きつと

オ しぶしぶと

問4 線①「お母さんを納得させるための言い訳」とありますが、そもそもお母さんは普段から娘(主人公)をどういう性格とみていましたか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 続けることは続けるが、努力はしない性格。

イ 初めはがんばるが、長くは続かない性格。

ウ 気が向かないとなかなかやらない性格。

エ 好きなことは最後まであきらめない性格。

問5 線②「オール木成のこと」とは具体的にどのようなことですか。文中の言葉を使って二つ答えなさい。なお、一つ目は十五字以内、二つ目は十字以内で答えなさい。

問6 線③「練習をする」というセンスがまったくなく」とありますが、わかりやすく言いかえるかどうかということですか。文中の言葉を使って二十字以内で答えなさい。

問7 線④「私は腹立たしかった」とありますが、この時の主人公の気持ちに当てはまらないものを選び、記号で答えなさい。

ア オール木成の練習が毎日あるから、補習には行きたくなかった。

イ 三日くらいがんばれば必ず弾けるはずだから、補習には行きたくなかった。

ウ 過去の経験から本番では何とかなるはずなので、補習には行きたくなかった。

エ せっかくの休みの日なのに、わざわざ補習に行くのは嫌だった。

問8 線⑤「同情とも哀れみともつかない変な表情」とありますが、

この表情にはどのような気持ちがかくされていますか。「気持ち」に続く形で文中からぬき出しなさい。

問9 線⑥「先生だって本当はイヤイヤなんだよ」とありますが、主人公がこう思う理由と考えられる一文を文中から探し、その文の最初の五字を答えなさい。

問10 線⑦「私はこのとき本当に、すごい衝撃を受けた」とありますが、どのようなことに対してですか。「こと」に続く形の四十字以内の言葉を文中から探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

問11 線⑧「それ」は何を指していますか。文中の言葉を使って二十字以内で答えなさい。

問12 線⑨「それ以外はけっこううまくできた」とありますが、この時の主人公の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 当然だと思う気持ち イ 得意な気持ち ウ 残念な気持ち  
エ 安心した気持ち

問13 線⑩「意地悪く思ってしまった」とありますが、具体的にどのようなに思ってしまったのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 二回もミスをしたみどりちゃんは、心の中ではきつと残念がついてると思ってしまった。

イ 教えてくれなかった先生に対して、みどりちゃんが恨んでいるにちがいないと思ってしまった。

ウ 私だけ補習をして結果を出したことに對して、みどりちゃんみどりちゃんが妬ねたんでいると思つてしまった。

エ 二回もミスをしてしまったみどりちゃんは、自分自身をひどく責めていると思つてしまった。

**問14**

——線①「ゆがんだ顔」とはどのような顔ですか。文中の言葉を使つて五字で答えなさい。

